

大学教育における児童文学作品の活用(7)

— エーリヒ・ケストナー『飛ぶ教室』から —

Utilization of Juvenile Literature Works in University Education (7)

— Based on “*The Flying Classroom (Das fliegende Klassenzimmer)*” by *Erich Kästner* —

茶谷 薫 CHATANI Kaoru

(芸術教養領域)

はじめに

前年の本誌等で述べたように社会人や大学生においても、子ども向けの小説やマンガ作品から学べることは多数ある^{1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9)}。子どもの頃に読んだ作品を再読すれば、当時は理解できなかったことや、物語に深みを与えている様々なことが理解できるからだ。

本稿では児童文学作品のうち、本誌前巻⁹⁾に記した『点子ちゃんとアントン』の作者であるエーリヒ・ケストナーが、その2年後に公刊した『飛ぶ教室』について紹介した後、この邦訳版を題材にした授業で活用可能な内容を列挙する。なお、本稿では、原本と同じ挿絵が入り、公立図書館などで所蔵数が多く、手に取りやすい、岩波書店から出版された池田香代子訳(2006年初版)¹⁰⁾を底本とする。『飛ぶ教室』の邦訳の概略については次節で述べる。

『飛ぶ教室』について

作者・挿絵画家

『飛ぶ教室 (Das fliegende Klassenzimmer)』はアドルフ・ヒトラーの国家社会主義ドイツ労働者党(ナチス)が政権を握った1933年に出版された。作者は世界的に知られるエーリヒ・ケストナー(Erich Kästner)である。ケストナーおよび表紙や挿絵を描いたヴァルター・トリアーについては本誌前巻⁹⁾に簡単にまとめた。本稿では当該書籍に関連する部分のみ以下、簡単に説明する。

『飛ぶ教室』執筆直前に、ナチスから睨まれていたケストナーらの書籍が焚書された。この大事件を、ケストナーは大胆にも群衆に紛れ、観察していた。ケストナーの作品の挿絵を寄せているトリアーはユダヤ人であったため、第二次世界大戦ではイギリスに亡命し、イギリスの宣伝工作に協力した。その後はカナダに移住した。これらについては池田も「訳者あとがき」で記している¹⁰⁾。

邦訳版

『飛ぶ教室』は多数の翻訳者によって、様々な出版社から和訳が送り出されてきた。『点

子ちゃんとアントン』同様、高橋健二が初期の重要な翻訳者である。管見の限り高橋が戦後1946年に『赤とんぼ』（実業之日本社）に連載したものが最初の邦訳であろう。1950年には高橋訳の『飛ぶ教室』のうち「四場」が、斎田喬らの『マッチ売りの少女：世界名作劇集学校図書館文庫：5』（牧書店）に掲載された。1959年、池田仙三郎らの『少年少女世界文学全集 23 ドイツ編(6)』（講談社）には小松太郎訳が、高橋健二訳の『点子ちゃんとアントン』、植田敏郎訳の『エミールとかるわざ師』とともに収められた。1960年には高橋健二訳の『飛ぶ教室』が公刊され、同じく高橋訳のヘルマン・ヘッセの短編を複数収めて、『飛ぶ教室（世界少年少女文学全集：15）』（東京創元社）として出版された。『アルプスの少女』とともに高橋訳の『飛ぶ教室』が収められた『アルプスの少女：飛ぶ教室（児童世界文学全集：14）』が1961年に偕成社から出版された。

1962年には同じく高橋訳に、元々のトリアーの挿絵が付された『ケストナー少年文学全集4（飛ぶ教室）』が岩波書店から出された。岩波書店は同じ高橋訳のものを、1993年に『飛ぶ教室（岩波世界児童文学集：20）』、2003年に『飛ぶ教室 新装版（岩波世界児童文学集）』という形でも出版している。本稿で参照した2006年の池田香代子訳は、高橋訳に代わり岩波書店から出版された新訳版となる。その他、植田敏郎、山口四郎、高木卓、飯豊道男、若松宣子、丘沢静也、池内紀らがそれぞれ翻訳したり、日本の画家の挿絵が付されたりした多数の邦訳版がある。

構成・まえがき・あとがき

『飛ぶ教室』は、「まえがき」の章が2つ設けられ、そこで執筆経緯がフィクションを交えて説明される。作者のケストナーは、夏に冬の物語を執筆しなければならないが、筆が進まない。そこで、母から雪山が見える避暑地に送り出され、動物や虫に囲まれながら、暑い夏の中、雪山を見上げて冬の物語を書くという設定である。「まえがき」には、『飛ぶ教室』の主体となる物語に出てくる少年の一人、ジョニー（ヨーナタン・トロッツ）が幼い頃に父親から捨てられ、親切な船長に引き取られた経緯が記されている。

続く『飛ぶ教室』の物語の主体は12章から成っている。ここには「まえがき」のようにケストナーは登場しない。その後、著者の「あとがき」があり、これが物語執筆の後日談で、12章で描かれた時から2年経った少年たちの様子が、ジョニーと船長、ケストナーの鼎談で示される。

さらに書籍の最後に、訳者の池田が「訳者あとがき」で作品と作者、挿絵画家についての解説を加えている。

あらすじ

ドイツのキルヒベルクにあるギムナジウム（大学進学を目指す男子学校）とその周辺、および主要登場人物の1人の帰省先が物語の舞台である。12月のクリスマス休暇直前と

いう時期設定だ。『飛ぶ教室』はケストナーの作品名であるが、作中ではジョニーが書いた演劇のタイトルともなっている。後者を劇『飛ぶ教室』と以下、表記する。

1章ではジョニーたち5年生がクリスマス集会に向けて、劇『飛ぶ教室』を練習する。劇に出演する寄宿生の5年生たちが主要登場人物だ。劇『飛ぶ教室』は飛行機で世界を旅し、地理を学ぶ授業を描く5幕ものである。首席で絵も上手いマルティン・ターラーが舞台の背景を描いた。劇中、各地を見て回る際に、ウーリ・フォン・ジンメルンが演じる少女が連れ去られる。最後は少女も無事で、皆で「聖しこの夜」を歌い、大団円を迎える。ジョニーたちは練習中、通学生で同級生のルーディ・クロイツカムが実業学校の生徒たちに書き取りノートとともに攫われ、フリドリーンがけがをしたことを知る。

2章では、5年生たちが「禁煙さん」と呼ばれる素性不明の男の家でルーディの救出会議を開く。その家は「禁煙さん」が借りている市民農園に設置された払い下げの禁煙車両を改装したものだ。農園はギムナジウムの近くにある。ジョニーたちは「禁煙さん」が彼らの学校の教師でもあり、寄宿舎の舎監でもあるベク先生と知り合いだと察する。

3章では、劇仲間のゼップ（ゼバスティアーン・フランク）が実業学校のリーダーのエーガーラント宅に交渉に行き、ルーディの居場所を探る。「禁煙さん」は、大掛かりな喧嘩では大問題になるため、各学校から代表1名ずつを出し、その2名の決闘で勝敗を決めるべきだと忠告する。

4章では、劇仲間のマッツ（マティアス・ゼルプマン）と実業学校代表のヴァーヴェルカが決闘する。マッツが勝利したが、実業学校の生徒はエーガーラント以外、人質のルーディの引き渡しを拒んだ。マルティンらはルーディを救出しに行き、残ったギムナジウム生は3年生も参加して実業学校生と雪合戦で勝つ。エーガーラントは実業学校のリーダーを降りた。

5章では、寄宿舎に帰着したジョニーたちが、9年生に外出の規則違反を咎められ、ベク先生のところへ連行される。経緯を聞いたベク先生は、自分自身も寄宿生だった時に病身の母親を見舞うために外出違反をしたと話す。理解のない教員たちに咎められたベク先生は親友に助けられた。その親友も今は行方不明だ。先生は理解のある教員として若い生徒を守るためにギムナジウムに戻ったというのだ。ジョニーとマルティンは「禁煙さん」がベク先生の親友だと推理する。

6章は、寄宿舎での生徒の様子描写である。実業学校の生徒に焼かれた書き取りの点数表をマルティンが復活させようとする。マルティンとジョニーはベク先生と「禁煙さん」を会わせようと計画する。就寝時刻の前後の様子や、寝台に悪戯する様子、上級生が幽霊などの格好をして部屋から部屋に練り歩き、1年生が怯える様子などが描かれる。

7章では、クロイツカム先生の変った言動が描かれる。授業後、ジョニーとマルティンがベク先生を「禁煙さん」と引き合わせる。

8章は、劇本番の前日である。劇の稽古は大成功だったが、ウーリが勇気を示すために

高所から飛び降り骨折し、劇の出演も帰省もできなくなった。マルティンが親からの仕送り郵便を開封したところ、母からの金策ができないという悲しい手紙と、帰省の交通費に足りない金額の切手が入っていた。マルティンはショックを受ける。

9章では、マッツはウーリの骨折の遠因を作ったと自責の念にかられる。マルティンは帰省できないことに悩む。夜、ベク先生は「禁煙さん」、本名ローベルト・ウートホフトがピアノを弾き、夕食と薄謝を受け取っている酒場に赴く。酒場は町の反対側で、ベク先生は客や店に悪印象を抱く。食事と「禁煙さん」の仕事が終わった後、2人は徒歩でギムナジウムに向かう。途中で見かけた郵便屋が回収中の配達物には、帰省できないマルティンが両親宛てた手紙と絵が入っていた。2人の大人はその悲しさを知らない。

10章ではクリスマス休暇直前の、最後の授業日・12月23日の落ち着かない生徒たちと、それを熟知している先生たちの授業の様子が活写される。寄宿生は荷造りに追われる。授業後は体育館でクリスマス集会が開かれる。優等生のマルティンは様子が変わる。劇『飛ぶ教室』の総ざらいの時も、マルティンは冴えない。しかし、ウーリの代役も活躍し、本番のクリスマス集会は大成功だった。ベク先生が「禁煙さん」を生徒に紹介し、ジョニーは5人からのプレゼントを彼に渡す。良い夜だったが、マルティンは帰省できない悲しみを堪え、「泣くこと厳禁」と寝言をつぶやく。それを耳にした、夜回り中のベク先生が昼間の様子も合わせて気にかける。

11章は、帰省で大騒動になっている12月24日の寄宿舎や駅の様子を描く。ベク先生はマルティンに、列車の往復乗車券代に十分足りる20マルクをプレゼントする。マルティンは両親へのプレゼントを買って、故郷のヘルムスドルフに向かう。

12章ではマルティンが、両親が悲しみに沈んでいる中、帰宅する。両親は喜び、マルティンはこの幸せをくれたベク先生へ宛てた葉書にお礼の絵を描く。母はそこにお礼の手紙を添え、父も名前を記す。家族3人は暗い中、葉書を投函しに出かけ、幸せを噛み締める。

『飛ぶ教室』から学べること

この物語にも多くの学びの糸口がある。それを列挙する。

地理、歴史、文化

ジョニーが生まれたのはニューヨークで、父はドイツ人、母は米国人という設定である。本誌前巻に記したが、『点子ちゃんとアントン』でもドイツの富豪宅で働くメイドの兄弟が米国に行っている、という設定があった⁹⁾。ドイツは当時、経済的に疲弊し、それがナチスの大躍進を招いた一因だと言われる。フィクションであっても当時の伸び盛りの米国に活路を見出したり、出稼ぎに行ったりするドイツ人がいたこと、彼らが全て成功者だったわけではないことが示されているのだろう。

父親の偽りで幼いジョニーが、既に亡くなっていた祖父母を待ち続けたハンブルクはドイツ北部に位置する欧州屈指の港町で、現在は国際海洋法裁判所もある。かつてはハンザ同盟の自由帝国都市であった。ただし、海に直接面するのではなく、北海に注ぐ大河エルベの河口から約100km上流にある。鉄道においても重要で、北欧からの列車がここを通り、中央ヨーロッパへ向かう。ニュース雑誌の『シュピーゲル』や、通信社のDPAなどの本社がある。ドイツでは最古の証券取引所や、最古の商業銀行であるベレンベルク銀行、航空会社のルフトハンザ、ピアノ製造のスタインウェイ・アンド・サンズなどもある。『飛ぶ教室』にはドイツの最大都市・ベルリンが出てくるが、ベルリンについては本誌前巻で記した。

劇『飛ぶ教室』では古代ローマの都市で、ヴェスヴィオ火山の噴火で埋まったヘルクラネウムやポンペイ、エジプトの3大ピラミッドやスフィンクスがあるギサ、大河のナイル、北極、に生徒たちが訪れる。エジプトの場面では古代エジプトの王・ラムセス2世、天国の場面ではイエスに従った使徒であり、初代ローマ教皇とされるペテロ（ペトロ）が登場する。また、9月29日の聖ミヒヤエル祭という言葉が出てくるが、ミヒヤエルは聖書に登場する悪魔を破った天使のミカエルのことである。

欧州の保養地のリヴィエラも喩え話の一つとして出てくる。rivieraはイタリア語で海や湖や川の岸を意味する。元来は普通名詞だったが、19世紀からリゾート地として有名になった景勝地・避寒地を指す固有名詞となった。リヴィエラは小惑星や車、ゲームなどの名称にもなった。日本でも森進一の『冬のリヴィエラ』という歌のタイトルにもなっている。

マルティンがベク先生から貰ったお金で父親にハヴァナ産の葉巻を買う場面がある。ハヴァナはスペイン語のLa Habana、英語表記はHavanaで、vとbが異なる。キューバの首都で、カリブ海の最大都市である。元々はスペインのディエゴ・ベラスケス・デ・クエリヤルが、16世紀初めにキューバ島の南岸、バタバノ湾側に居住地を築いたことに始まる。その数年後に現在のフロリダ海峡側に都市が移された。その後、スペインのキューバ総督府の首府となり、植民地経営の中心地となった。英仏蘭の海賊襲撃に遭ったことで、要塞が築かれ軍事都市となった。18世紀初め、ユトレヒト条約により英国の限定的な貿易参入が認められ、その後は密貿易が盛んとなった。その約半世紀後、ハヴァナは英国支配下の自由貿易港となったことで、多数のアフリカからの奴隷が連れてこられた。さらに英国からキューバとフィリピンのマニラがスペインに返還され、英国は現在の米国の一部であるフロリダを手にした。19世紀に近隣の仏領ハイチが黒人国家として独立したことで、ハヴァナに亡命した白人農園主がサトウキビ栽培技術を導入した。奴隷貿易の拡大により、サトウキビなどの栽培が盛んになり、ハヴァナは糖業の中心地となり、黒人奴隷や移民の流入が多民族社会の元となった。19世紀にはラテンアメリカ初の鉄道が敷かれ、ハヴァナの人口も激増した。19世紀末、米国海軍の戦艦がハヴァナ港で爆沈し、米西戦

争の発端となった。1902年にキューバが共和国として独立し、ハヴァナはその首都となった。独立前からキューバ投資の主要国だった米国は1920年代の禁酒法施行後、享楽を求めた米国人がハヴァナに来るようになり、当地はリゾート地として賑わった。アーネスト・ミラー・ヘミングウェイもハヴァナで『老人と海』を執筆した。葉巻の原料であるタバコの葉の産地はハヴァナよりも西のプエルタ・アバホで生産された。油分を含む葉を育てるために最適黒みがかかった赤土と熱帯の気候が合っているという。

『飛ぶ教室』出版時、キューバは独立国になっていたが、世界にはまだ植民地が多数残っていた。ジョニーが植民地の雑貨を売る店のショウウィンドウに見入るシーンがある。ジョニーが生まれた米国も18世紀末までは英国の植民地だった。ドイツも第一次世界大戦直後まではニューギニア、アフリカ、南米などに植民地を持ち、現在の中国にも他の列強諸国とともに租界を有していた。ドイツは第一次世界大戦で負けた結果、日本を含む戦勝国に植民地を渡すこととなった。

「まえがき」でケストナーが赴くのがオーバーバイエルン (Oberbayern) である。この州にある中心的な都市はミュンヘンで、オーストリアとの国境である。ドイツの最高峰であり万年雪があるツークシュピッツェ (Zugspitze, 2,962m) があり、これも国境の山である。ドイツの作曲家リヒャルト・シュトラウスは、10代の頃のここの登山の体験をもとに『アルプス交響曲』を作曲している。Zugspitze とはドイツ語で「峰の連なり」もしくは「連なる峰」という意味である。

『飛ぶ教室』には、郵便が寄宿生に配られたり、ポストから郵便物が回収されたりする様子や、翌日には葉書が届く、という描写がある。また生徒たちが駅から列車に乗りし帰省する様子も描かれている。郵便と鉄道は近代国家とセットになって発達したインフラであり、安価な通信と国内移動の保障がどのようにして近代国家成立と関わるか、という話の糸口ともなる。

架空の地名と伝説

物語に出てくるドイツの地名の多くは、前項に記したハンブルクなど以外は実在しない。主要な舞台のキルヒベルク (Kirchberg) は、教会 (Kirch) のある丘陵 (Berg) という一般的な語である。高台にある教会と学校がセットになった小さな都市、というイメージだろう。また、プロヴィンツ (Provinz) は州や省、県、カトリックの大司教管区、古代ローマの属州、地方や田舎を示す単語である。マルティンの両親が住むヘルムドルフも架空の地名で、「ドルフ (Dorf)」は村、田舎の意である。

マッツの故郷のフランケンシュタイン (Frankenstein) については、フランケンシュタイン城という、錬金術師で死体を使っているという噂が立てられたヨーハン・コンラート・ディッペルがいたことがある城 (要塞) と関連させているのかもしれない。また、フランケンシュタインで最も有名なものは、英国のメアリー・シェリーが1818年に匿名で

出版した『フランケンシュタイン、あるいは現代のプロメテウス』であろう。シェリーはフランケンシュタイン城から少し離れたゲルンスハイムを旅行したこともあるため、関連が推測されている。

学校のある架空の都市には、市民農園が学校近くにあり、シェルフ親方のパン屋が北通りにあり、他に劇で鬘を借りるクリューガー親方の床屋、歩兵部隊の兵舎、緑地公園、エーデン（Eden、エデンの園、楽園）映画館などがある設定だ。林務官舎通りとフォアベルク（Vorberg、山の前・丘の麓）通りの十字路、ヴィルヘルム（Wilhelm、男子名・威張る、直訳は「意思の甲」）広場、カイザー（Kaiser、皇帝）通りなど、一般的な街路名もつけられている。歩兵部隊が晩に帰営ラッパの音を出し、ウーリの郷愁を掻き立てられる、という場面もある。このようにキルヒベルクは架空だが、ありそうな、あまり大きくない都市という設定だろう。

市民農園は、20年前は森だった、という記述から、近代社会が開発を進め、森林を農地や宅地に変えてきた、一般的な歴史も読み取れる。

校内には外れに上級生しか行けない、気味の悪いオリンポスの山という丘があり、そこには古代ゲルマン民族の生贄の石があるということになっている。オリンポスはギリシャ北部にある神々が住むとされた山と同じ名称である。ゲルマン族は池田の訳注にもあるようにドイツ語などの元となったゲルマン語を話していた古い民族である。物語では復活祭前に不気味な儀式があるという設定だが、これもキリスト教がゲルマン人の慣習と摩擦を起こしつつ融合されていった歴史を連想させるものかもしれない。

気候、季節と文化

欧州内陸部は寒冷地である。物語にはそれを連想させる描写がある。例えば校庭が校務員によってスケート場になった、という場面である。ここではアイスホッケーチームとスケートをする生徒の間で喧嘩が起こる。また、下級生が雪かきと箒で氷上の掃除をさせられる。雪合戦や、木を揺さぶって雪を落とす悪戯、櫓をしまう地下室、靴の下で雪が軋む様子、靴に付着した雪が室内で融け水たまりを作ること、雪合戦時の小石を入れた雪玉による負傷、雪を襟首に入れて意識を覚醒させようとする、顔も手も凍えて赤紫色、などの描写は日本の雪国と似ている。ボブスレーのコースに行くようマルティンが母の手紙で勧められる描写は、日本の限られた地域で見られるのかもしれない。

寒いクリスマスに、マルティンが母親に温かい毛糸編みのルームシューズを贈り、両親が彼にウールの靴下や南洋についての本を贈ることは理解しやすい。クリスマスプレゼントの中にチョコレートでコーティングされたレープクーヘンという菓子が出てくるが、これはナッツや果実、香辛料などを入れた保存性の高いものである。「禁煙さん」の家になっている払い下げの列車の車両には青黒い煙突と、頻繁に燃える「だるまストーブ」が設置されている。「禁煙さん」が小さなモミの木を買い込み、モールや金色のクルミを飾り

付ける描写からもクリスマスの様子が伝わってくる。

マルティンが両親に10年後は自分が稼いでアルプス越えの旅に連れて行くという絵を描く。アルプス山脈を越え、南の温暖で中世の先進地だったイタリアの方へ行くことは、ゲーテの『イタリア紀行』¹¹⁾にもあるよう、重要な意味を持つだろう。

ゼップがマルティンと町で会った時、家族へのプレゼントを買っていた。それはゼップにとり、「ばつが悪い」古臭い習慣だが、楽しさもあるという。これは今の日本でも所謂伝統的な行事の簡略化、廃止の動きと似ていると連想させられる。

動物に対する感覚

「まえがき」では著者とヒト以外の動物との触れ合いが描かれている。著者は、クジャクチョウにゴットフリート、小さい角を持つ茶色の仔牛にはエドゥアルトと名付ける。仔牛は昼間、山の上の放牧場において、夕刻くらいに飼い主の農家宅に戻る。その際、著者のところへ寄る。少し離れたところで著者を見つめる白黒の斑猫は魔法をかけられ、本当は人語を話す、と著者は夢想する。

ベルリンのアパートに戻った著者は、チョウは死に、仔牛は雄牛になったか、ピフカツにされたか、と想像する。雄牛がベルリンに来た場合、喜び、アパートのバルコニーで飼うだろうとも夢想する。避暑地で著者を慰めた仔牛がピフカツ、つまり屠られ、その肉が食卓に上がることを想像する、という状況は、日本の児童文学ではあまり出てこないものだろう。藤子・F・不二雄の『ミノタウルの皿』¹²⁾を連想させる話でもある。

ギムナジウム

当時のドイツの学制は現在の日本のものとは異なり、初等教育（基礎学校、小学校）が4年制で、男子はその後、9年制のギムナジウムのエリートコースか、職人を目指す実業学校に進学していた。現在のドイツも基本はこの学制である。

ギムナジウムには自宅からの通学生と、寄宿舎（寮）に住む寄宿生がいるが、全寮制のものもある。『飛ぶ教室』のギムナジウムは市当局が人事権を持ち、寮には舎監（寮監）の教員が配置された形である。物語ではベク先生が舎監担当している。ちなみに『ハリー・ポッター』シリーズ¹³⁾の魔法学校も似たような形式であり、寮毎に異なる舎監の教員が配置されている設定だ。

寮の食堂には長いテーブルがあり、そこで食事を摂る。これも魔法学校と似ている。寝室は大部屋で全学年の寄宿生が入れられ、最高学年の生徒が室長を務める。校務員が鐘を鳴らし、時刻を告げる。ある日、就寝時刻に9年生が幽霊などの仮装をし、1年生を脅し、粉をベッドに撒いていくパレードを行う。これは日本の旧制高校などの寮で行われたストームのようである¹⁴⁾。

『飛ぶ教室』のギムナジウムは約200人で9年生まで在籍している。1学年20人くらい

で、日本の大人数クラスとは全く異なる。9年生は若い女子を入れたダンスを習う。これは一種の出会いの場でもあったのだろうか。また、学帽を被るシーンが幾つかあるが、これも制服の歴史を知る契機となる。

学校

訳者の池田が記すよう、ケストナーは自身が通った全寮制の学校が規則で生徒を縛り、自由が無かったことを嫌悪していた。ケストナーが生徒時代、校則を破り、病身の母を見舞った体験は『飛ぶ教室』のベク先生の回顧に近い。ベク先生や親友の「禁煙さん」はケストナーが描く理想の大人、教師である。生徒の日常と気持ちを把握し続け、理想的な指導をする。生徒が、自分を理解しようとしないう教師（に限らないが）に、自身が抱える困難な事情を話せないこと、舎監の上級生が権力の正しい行使ができないことなどは、ケストナー自身の経験に照らしての描写だろう。

ケストナーがあるべき姿としての学校を描いたことを、訳者の池田は「教師にならずにペンの先から正義さんを生んだ。それで多くの読者が正義さんの生徒になった気分を味わった」と解説した。「禁煙さん」は生徒に「一番大切なことを忘れないで欲しい。過ぎ去ってほしくないいまこのとき、子どもの頃のことを忘れないでほしい」と呼び掛けるが、これはケストナーの心からの叫びだろう。ギムナジウムの5年生という、15歳くらいの生徒を主役にしたこの物語は、ケストナーが思春期の重要性を感じているからこそ生み出されたのだろう。

「まえがき」でケストナーが、他の作家が執筆した児童書について、子どもがいつも楽しく、幸せだという「うそつき」な描写をしている、と怒るシーンがある。子どもも悲しく、みじめな気持ちになることを理解しない、自身の子どもの時代を覚えていない大人について批判しているわけだ。これも、ケストナーが子どもを、単なる「子ども扱い」せず、加えて、子ども時代の重要性を理解していることの表れだろう。

7年生が校長を揶揄った自慢話に対し、他の生徒たちは疑問を持ち、校長の善性を感じた7年生が自身を恥じる場面も、子どもたちが正しく生きようとする力を持っていること示そうとしていると思われる。

奇矯な言動をするクロイツカム先生についても尊敬すべき学究であることを匂わせている。ケストナーは、ベク先生のような、「分かりやすい」理想の教師以外の教員を描くことで、多様な人が各々の能力を活かすという現在の理想的な学校や社会の在り方を先取りして示している。

ウーリは屑籠に入れられ、教室に吊り下げられるというイジメを受け、それを見返すために高所から飛び降りる。自分の尊厳のために勇気を示す、ということはイジメ問題とも深くかかわっているだろう。尊厳を飛び降りる形で示すべきかについては疑問であるが、この挿話はイジメの根本的な解決が困難であることを示している。

マルティンは首席で授業料の半額免除を受けているが、単なる優等生ではなく、殴り合いの喧嘩に必ずおり、誰の言いなりにもならない。彼の絵は美術学校の教授に褒められる。美術など芸術が軽んじられる日本で、このような主要キャラクターが造形されることは少ないのかもしれない。

当時の意識

訳者の池田は頻繁に表れる喫煙シーンについて、ケストナー自身も愛煙家で、この頃は喫煙が健康に悪く、特に若者に有害であることが知られていなかった、と記した。それでも、「禁煙さん」が住む禁煙車両が既にあったことに驚かされる。日本で初めて禁煙車が国鉄にできたのは明治時代の1886年の通達に遡り、中等車のうち1両は禁煙とされた¹⁵⁾。土屋によれば、外国人の女性にたばこの煙を嫌う人が多かったことへの配慮である。これもまた外圧によるわけで、禁煙車の源流は日本にない。

訳者の池田は、作中の女を軽んじるセリフについても触れ、2003年版の映画ではエーガーラントが少女になっている、ケストナーが現在いればそれが良いと言うのではないかと記した。『飛ぶ教室』にはショーペンハウアー（1788～1860）のミスジニー¹⁶⁾について伺わせるゼップのセリフもある。

マッツが友情を込めてであるが、小柄で臆病なウーリを「チビ」と呼ぶ。実業学校との争いで加勢を頼んだ3年生のシュミッツについても、背が低く肥満のため「小だる」という仇名が与えられている。身体的な特徴を仇名にすることは現代では問題だろう。

現代問題の胚胎

マルティンの家に代表されるように貧困の問題は、本誌前巻で記したアントンの母子家庭でも記されている。マルティンもアントンも貧しく、アパートの上層に住む。ケストナーは、貧困は本人の能力の問題ではなく、社会の問題である、と述べている。「自己責任論」が強い日本では、現在もこの認識は重要だろう。

一方、「分断」の萌芽も、ケストナーの意図とは別に、描かれてしまっているのではないか。ギムナジウムの生徒と実業学校の生徒との争いについて、ジョニーらが「禁煙さん」に説明する場面で、昔から両校には争いがあると述べる。その積年の闘争を別とすれば、ルーディが攫われた直接の原因は、ジョニーらギムナジウム生が実業学校生の旗を奪ったことにある。実業学校生はベク先生に連絡し、返還を要求した。ベク先生は激怒し返すように伝えるが、ギムナジウム生は旗を破って実業学校の校庭に落としておいた。その報復で実業学校生はルーディとノートを奪ったのである。その後、ゼップがエーガーラントに返還を求め、エーガーラントは、旗を破ったことへの謝罪と人質返還の依頼をするよう求める。ゼップはそれを吞まず、最終的には決闘になる。決闘ではマッツが勝利し、エーガーラントは人質のルーディを返還すべきだと仲間を説得するが、仲間は同意しな

い。筆者個人の倫理的な基準ではギムナジウム生が元々は悪く（もちろん、ルーディとノートを奪った実業学校生も拙いが）、実業学校生との決闘に持ち込むことには疑問を抱いてしまう。旗を破ったことを謝罪すれば済むが、そうできないプライドや、実業学校生への侮りが感じられる。つまり、大学に進学し、社会の上層を目指すギムナジウム生と、職人という誇り高い道を目指す実業学校生の社会的な地位の問題が潜んでいるのではないか、と思われるのである。

それは生徒だけではなく、バク先生のような理想的な教師の言動にも表れている。例えば、「禁煙さん」がピアノを弾く代わりに食事と薄謝を得ている酒場の「最後の骨まで亭」に赴いたバク先生は、店と客について「がさつ」で「かなり不作法」だと否定的な感想を抱く。そして「禁煙さん」を校医にし、下品な世界から遠ざけようとする。その誘いを受けた「禁煙さん」は、自身が妻子を失った衝撃で社会の上層から離れたことで熟考し、読書をし、自分のような変人も少しは必要だと感じ、上昇志向についても疑問を抱いたと述べる。彼は「なにが大切かということに思いを巡らす時間を持つ人間がもっと増えると良い。金も地位も名声もしょせん子どもじみたことだ。おもちゃだ。それ以上じゃない」と話す。一方で、「禁煙さん」はバク先生の誘いを了承する。「禁煙さん」は社会の下層と上層を繋ぐことができそうな人ではあるが、それ以上の言及はない。ケストナーがこの物語を執筆した段階で、既に分断の芽は胚胎されていたか、そもそも社会が上層と下層にずっと分断し続けてきているだけのこともかもしれない。しかし、この分断こそが、現在の社会問題の基盤となってしまっているのだろう。

『飛ぶ教室』には社会が平和でなくなっていくことについても描かれている。クロイツカム先生がウーリへのイジメを知り、「平和を乱すことがなされたら、それをした者だけでなく、止めた者にも責任がある」と書き取りをさせる場面がある。訳者の池田は、書き取りノートがルーディの目の前で燃やされたのはナチスの焚書を思わせる、と述べた。その上で、ナチス協力者だけではなく、何もせずに黙っていた多くの人々にも責任があり、問題が起きた後に反省するのではなく、ケストナーのように同時代に向けて命がけの警鐘を鳴らしたことについて称揚した。また、「世界の歴史には、かしこくない人びとが勇気を持ち、かしこい人びとが臆病だった時代がいくらかもあった。これは正しいことではなかった」が『飛ぶ教室』で最も有名な言葉だとも記した。この言葉がある「まえがき」で、ケストナーは「ごまかされないで欲しい」、「不運はしっかり目をひらいて見つめることを、学んでほしい」、「かしこさをともなわない勇気は乱暴でしかないし、勇気をとらなわないかしこさは屁のようなもの」、「勇気ある人々がかしこく、かしこい人びとが勇気をもつようになってはじめて、人類も進歩したなど実感される」と書く。日本社会を含む、SNS上で陰謀論やデマに惹きつけられ、排外主義の政治家を称揚する社会では、非常に重要な言葉だろう。

「あとがき」には大都会のベルリンと避暑地のオーバーバイエルンの対比が記されてい

る。ケストナーは何れも重要で両方とも必要だと記す。日本では人口が都市部に極端に集中し、地方では過疎と高齢化が進行している。里山として利用してきた山も、主要な燃料が化石燃料に移行し、薪や炭でなくなったため、森林の樹木利用が激減した。耕作放棄地も増えている。そのような状況は、人を恐れていたクマなどの野生動物の激増に繋がっている。彼らは人を恐れなくなり、人間の住む地域に出没し、場合によっては食べ物を求めて人家に入り込んだり、人を襲ったりするようになってきた。そのような警告は、専門家から既に為されていた¹⁷⁾。地方の過疎が進めば、現在の都市部にも人を恐れなくなった野生動物が入ってくる。都市部に人が集中するのは経済的利益が得られやすいからであるが、野生動物などの環境問題から見ると、大都市部でも他人事ではない。現在はこの社会経済構造の転換が求められているわけだが、その点においてもケストナーの都市も田舎も不可欠だという言葉は今も重要である。

4歳のジョニーが父親から受け取った小さな子ども用の茶色い財布とそこに入っている10ドル札を、ギムナジウム5年生になっても大切に持っている。ジョニーが親元に戻るマルティンに「慣れたよ、慣れ」、「親は選べない」、親が突然迎えに来ることを想像することがある、と語る場面もある。現在の日本でも児童養護施設やグループホーム、里親のもとで暮らす子どもが大勢いる。子ども達が健やかに暮らし、子育てに困難を覚えている保護者がすぐに相談でき、虐待にならないようにする社会的支援も重要だと改めて思われる場面である。

その他

他にも学びの糸口となるエピソードは多数ある。電気の発生や不定詞や利子計算がクリスマス休暇の直前では頭に入らない、という部分がある。7年生になったゼップは電子理論、気体運動論、量子論の本を読んでいる。いつも空腹で大食いのマッツは「牛馬飲食」と表現される。マッツが敵対する実業学校生を肉類のホワイトソース煮のフリカッセにしてやると息巻くシーンもある。『飛ぶ教室』では1年生には赤毛の生徒がいる、という表現がなされているが、欧米では「赤毛」が特別の意味を持つからだろう¹⁸⁾。マッツがマルティンの絵を褒め、イタリアのティツィアーノ・ヴェチェッリオやオランダのレンブラント・ファン・レインのようになれる、という場面がある。マルティンが帰省先で両親に星の光は遙か昔に発せられ、今見えている星の中には既に消滅した星もある、と光の速度について語る場面がある。その後、マルティンは流れ星に願いをかける。ジョニーを引き取った船長は商船の高級船員で、金モールと星章のついた青い制服を着ている。高級船員ならばジョニーをギムナジウムで学ばせる経済力があるわけだ。マッツが、芝居をしていると父親が知ったら家に連れ戻される、と話す下りがある。かつて、役者は社会的に良い職業だと考えられていなかったことを示唆している。

バク先生の地理の授業で、生徒は深い意味の籠った短い話を朗読する。ほとんどが動物

に擬した人間の話で、これはイソップ寓話などのことだろう。メルヘンや伝説を朗読する、という記述もある。ドイツ語ではメルヒェン (Märchen)、英語ではフェアリーテール (fairy tale)、仏語ではコント (contes de fée) という説話、口承文芸、民話や、それらから発展したクンストメルヘン (Kunstmärchen、創作メルヘン、創作童話) についても学びを広げられる。

骨折したウーリが休むベッドの横にはサイドテーブルがあり、校長のグリュンケルンがチョコレートを持って置いていく。チョコレートの原料のカカオは、南米原産で欧州の征服者を通じてスペインに渡った。カカオは飲料で、甘味を加え甘くなり、徐々に欧州他国にも広がり、19世紀にはココアパウダーや板チョコレート、ミルクチョコレートが発明された。ウーリがマッツに分けるチョコレートにはこのような歴史があり、またカカオ栽培における児童労働問題などの現代的問題もあることについても学びの入口となる¹⁹⁾。

飛び降りる前のウーリについて、ゼップが「ぜんまいを巻きすぎた時計」のように感じる場面もある。機械式時計の動力源は、ぜんまいばねを巻くエネルギーである。現在の多くの時計は電気で動くもののため、今の学生の身近には稀だが、ぜんまい仕掛けの玩具などがあり、欧州の錠前の発達とも深い関係がある²⁰⁾。

劇の練習後、生徒たちは衣装に3度唾を掛け合い、ゼップが「役者はそうする」と述べる場面がある。少なくとも現代の日本にはそのような風習はないようだが、「唾をつける」という慣用句があり、他者に取りられないよう先にその物を自分のものとしておいたり、前もって手を打っておいたりすることの意がある。自身の唾液を付けることで、所有権を得るわけである。他にも「眉唾、眉に唾をつける・塗る」という言葉もあり、これは狐に眉毛の数を知られると化かされるため、数えられないよう唾で眉毛を固める、という意味があった。唾に関わる言葉や、俗習、規制の歴史なども奥深い。

マルティンが両親のために描く絵をクリスマスツリーの下に置くつもりである、という記述がある。日本ではサンタが子どもの枕元にプレゼントを置く設定だが、米国では11月の第4木曜日の感謝祭の後から約1か月間、クリスマスツリーを飾り、その下に徐々にプレゼントを置いていく。『飛ぶ教室』のドイツも似たような形でプレゼントを置くわけだ。

マルティンの絵には馬車を牽く6頭の連銭葦毛 (れんぜんあしげ) が描かれる。連銭葦毛は馬の毛色的一种で、丸い銭を連ねたような斑があり (連銭)、誕生時に濃い色の黒や茶色の毛だったものが徐々に白くなっていく (葦毛) ことを示す。白馬に変わっていく変化の美があるのだ。平家物語では木曾義仲や平敦盛などの著名な武者が乗る名馬として描かれている²¹⁾。

訳者の池田は書名の「飛ぶ (fliegen)」について、「移動する」、「さまよう」という意味があり、主役のオランダ人に落ち着く場所がどこにもないという呪詛がかけられている、ワーグナーの『さまよえるオランダ人 (Der fliegende Holländer)』にもこの語が使われ

ていると説明した。これを通じて、元の意味が広がって別の意味を持つようになる言葉の性質についても池田は述べた。

大人の学びに有益な児童文学

前節でまとめたように、『飛ぶ教室』は「総合的な探究」やアクティブラーニングにも適した大人にも魅力的なテキストである。この魅力により日本でもタイトルを借りたものがある。その一つは児童文学のための雑誌である。石森延男、今江祥智、尾崎秀樹、栗原一登、河合隼雄、阪田寛夫らが編集委員を務めた雑誌の『飛ぶ教室 児童文学の冒険』である。これは光村図書(1990-1994年は楡出版、1995-2004年は休刊)が1981年に創刊した。同誌は児童文学の作品募集を行い、そこから著名な江國香織や内田麟太郎らを輩出し続けている²²⁾。また、NHK ラジオでは2020年から、作家の高橋源一郎をパーソナリティーに据えた『高橋源一郎の飛ぶ教室』を放送している。このラジオ放送から高橋は2022年、2025年に新書を出版している²³⁾。

私事であるが、筆者は小学生のときに高橋訳の『飛ぶ教室』を学校の図書室で読んだ。その頃は、マルティンが家に帰れて良かった、ベク先生は優しい、ジョニーやマルティンの才能が凄い、という感想を抱くのみであった。ただし、前述したようにギムナジウムと実業学校の生徒同士の争いについては、実業学校との勝負の契約自体が不公平な感じを覚えた。

大人になってから再読したところ、これまで本誌で紹介してきたように、幼い頃には理解できなかった様々な背景があることが分かった。本誌前巻で『点子ちゃんとアントン』でも触れたように、物語の舞台となったドイツの近代史と物語は深く関連しており、特にアントンやマルティン一家の貧困については、単なるフィクションではないことが理解できた。また、学校を嫌悪していた著者が、理想の教師がいる学校を舞台に子ども達を描くことに近代国家の大きな影響力を感じさせられた。学校とともに近代国家とセットになっている郵便や鉄道の制度にも改めて気づかされた。

本誌前巻で述べたようにケストナーは近代的な理想主義者の一人であるが、『点子ちゃんとアントン』に描かれた門番の息子への冷たさは、『飛ぶ教室』における実業学校のエーガーラント以外の生徒たちへの侮蔑と通じるものがある。前に記したように、現代のドイツをはじめ、様々な所謂先進国で愛国を標榜する政党が大躍進していることの遠因には、このような分断の根が近代国家に胚胎していた可能性がある。ケストナーのような優れた作家にして近代理想主義者は、意図せずその陥穽を描き出しているのだろう。

謝辞

本稿は名古屋芸術大学の個別研究費および令和4(2022)年度特別研究費(課題名「高大接続教育、大学教育、社会人教育における児童・ヤングアダルト文学作品およびマンガ作品の教材としての利用」)の助

成を受けた。編集と出版に尽力して下さった名古屋芸術大学図書館の教職員各位、校正にあたられた印刷・製本会社の方にも感謝する。

文献および註

WEB 掲載の情報については2025年10月14日が最終閲覧日である。

- 1) 茶谷薫、2020、大学教育における児童文学作品の活用(1)—カニグズバーグとリンドグレーンの生涯と作品から—、名古屋芸術大学研究紀要41巻 107-121
- 2) 茶谷薫、2021、大学教育における児童文学作品の活用(2)—山中恒『はくがはくであること』から—、名古屋芸術大学研究紀要42巻 157-166
- 3) 茶谷薫、2020、「学習マンガ」ではなく「娯楽マンガ」を教材利用する意義—『スター・レッド』を例に—、名古屋芸術大学教職センター紀要9号 2020、1-13
- 4) 茶谷薫、2021、娯楽マンガ作品を教材に—『暗殺教室』に描かれた理想の教師・学校像—、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要10号 63-75
- 5) 茶谷薫、2022、大学教育における児童文学作品の活用(3)—後藤竜二『算数病院事件』から—、名古屋芸術大学研究紀要第43巻 143-157
- 6) 茶谷薫、2023、娯楽マンガ作品を教材に(3)—山田芳裕作『望郷太郎』—、名古屋芸術大学キャリアセンター紀要11号 83-94
- 7) 茶谷薫、2023、大学教育における児童文学作品の活用(4)—古田足日『宿題ひきうけ株式会社』から—、名古屋芸術大学研究紀要第44巻 163-178
- 8) 茶谷薫、2024、大学教育における児童文学作品の活用(5)—佐野美津男『午前2時に何かがくる』から—、名古屋芸術大学研究紀要第45巻 109-122
- 9) 茶谷薫、2025、大学教育における児童文学作品の活用(6)—エーリヒ・ケストナー『点子ちゃんとアントン』から—、名古屋芸術大学研究紀要第46巻 151-162
- 10) エーリヒ・ケストナー、池田香代子訳、2006、飛ぶ教室、岩波少年文庫141、岩波書店
- 11) J. W. ゲーテ、相良守峰訳、1960、イタリア紀行(上・下)、岩波文庫 赤405-9、406-1、岩波書店
- 12) 藤子・F・不二雄、2023、藤子・F・不二雄 SF 短編コンプリート・ワークス—ミノタウロスの皿(1)—、小学館
- 13) J・K・ローリングが1997年に発表した『ハリー・ポッターと賢者の石』に始まる人気シリーズもの。映画も人気があった。日本では静山社から松岡佑子訳が出版されている。『ハリー・ポッターと〇〇』と題された7巻までである。〇〇には2巻から順に、秘密の部屋、アズカバンの囚人、炎のゴブレット、不死鳥の騎士団、謎のプリンス、死の秘宝が入る。
- 14) 旧制高等学校資料保存会、1985、旧制高等学校全書 第6巻 生活・教養編(1)、旧制高等学校資料保存会刊行部
- 15) 土屋武之、2023、新幹線も「喫煙ルーム全廃へ」明治に始まる禁煙化の歴史、毎日新聞 WEB、<https://mainichi.jp/premier/business/articles/20231108/biz/00m/020/008000c>
- 16) ショーペンハウエル、石井正・石井立訳、1968、女について、角川文庫、角川書店
- 17) 横山真弓、2024、令和のクマ騒動が人間に問うていること【増えすぎたクマ】このままでは人間のコントロール不能なフェーズに？クマ対応の「地域力」向上に必要なこと、Wedge ONLINE、<https://wedge.ismedia.jp/articles/-/35813>
- 18) ジャッキー・コリス・ハーヴィー、2021、北田絵里子訳、赤毛の文化史—マグダラのマリア、赤毛のアンからカンバーバッチまで—、原書房

- 19) キャロル・オフ、北村陽子訳、2007、チョコレートの真実、英治出版
- 20) 有澤隆、2006、時計の歴史、河出書房新社
- 21) 奈良国立博物館、2009年、正倉院展用語解説、<https://shosointen-glossary.narahaku.go.jp/rensenashige/>
- 22) 光村図書 WEB、書籍情報、飛ぶ教室、<https://www.mitsumura-tosho.co.jp/shoseki/tobu>
- 23) 高橋源一郎、2022、高橋源一郎の飛ぶ教室―はじまりのことば―、／2025、ラジオの、光と闇―高橋源一郎の飛ぶ教室 2―、／いずれも岩波新書の新赤版で番号は1948および2062、岩波書店